

YMCA Camp 100 Stories vol. 21



障がいのある子の 保護者として ～YMCA入門～

五味 宣子

Nobuko Gomi

東京YMCA永年会員
メンバー保護者

▼一人のリーダーとの出会いから

東京YMCAとの出会いは遥か30年昔のことです。夫の急逝後、子どもたちの知的障がいが発覚し、サラリーマンを続けていた私は2人の障がい児の放課後を確保するため、当時福祉を勉強していた学生さんのゆうこさんの応援を仰ぎました。当時、家にはお婆さんが3人もいましたが、障がい児の世話ができる状態ではありませんでした。その頃の私は、とにかくその日を無事に終えることだけで精一杯でした。ゆうこさんとは毎日お付き合いし、冬を迎える頃「江里ちゃんをスキーキャンプに連れて行きたいのですが、いいですか？」と言われ、驚き、戸惑い「嬉しいけど、無理でしょ？」とお返事した覚えがあります。当時、三鷹にあった武蔵野YMCAのリーダーだった、ゆうこさんは事前にディレクターさんに我が家の状況、江里の状態を説明し、何度も話し合いをし、自分がリーダーとして参加するキャンプに江里を受け入れようとしたことを後になって知りました。当時、YMCAが障がい児を一般の幼児キャンプに受け入れるなんて、私は考えてもいませんでした。親しみを持って「おじじ」と呼ばれていた遠藤久雄主事とお話ししたことがあります。「親だって大変な子なのに本当に申し訳ありません。」と言うと、「五味さん、1年の中のたった3日じゃないですか。」と言っていたかと思わず泣きそうになったものです。

お言葉に甘えて姉弟の夏冬のキャンプ参加は続きました。本人たちは次第にキャンプの楽しさを知り、健常者のお友だちもできました。障がい児のことを知らない同世代のメンバーや年上のリーダーとの関わりは、姉弟にとってはかなり刺激的でしたが、おかげで「コンタクトの取りにくい障がい児」から少し脱皮できたように思えたことが母にとっては何より嬉しいことでした。

▼ 「健常者がやることは全部やろう」

しかし、厚かましい母は「こんなに素敵なリーダー達との関りが夏冬のキャンプだけでなく、もっと頻繁に年間を通したチャンスはないだろうか？」という思いを強くしていました。願えば叶うものです。そこに救いの手の様に紹介された YMCA 障がい者プログラムフィットネスとの出会いはその後、今に至る長い付き合いとなり五味姉弟を育ててきました。

当時、及川栄子先生率いるフィットネスクラス（知的障がい児プログラム）は週 1 回の体育館運動と水泳でしたが、活動はそれに留まらず、年間を通してメンバーには様々な体験が待っていました。もちろん夏冬のキャンプにも参加しました。夏には徳島の海で泳ぎ、阿波踊りを覚えて帰ってきました。親の会が主催して大島で



三原山登山もしました。台湾に行き、台北 Y M C A の障がい者プログラムとの交流会には、何日も前から中国語を勉強し、現地では海水浴も楽しみました。いつも頼りになるリーダーと一緒に。毎週の水泳練習から、時折 Y M C A プールで水泳大会が催され、その後設立された日本知的障害者水泳連盟の大会出場へとメンバーを導きました。日本知的障害者水泳選手権第一回大会が辰巳国際水泳場で行われ、江里子が金メダルをいただいたことは今でも大きな節目として残っています。その後、試合会場は横浜国際プールに移り、逸太郎は記録を伸ばしジャパンパラ水泳出場を果たしました。先生がいつも大事にされていたのは「健常者がやることは全部やろう。この子たちと健常者、何が違うの？知的障がい者といえども身体は十分なのだから本当のことを教えよう。」と言うことでした。知的障害者水泳連盟のスタンスはまさに「障がい者だから」という配慮は一切なく「公式の場」で「公式の競技規則」に則って競技に臨むことであり、出場選手には大きな体験と学習になりました。

▼ マラソン、スキー選手への道



及川先生とのキャンプの中で一番強烈な思い出は「ホノルルマラソン参加」でありましょう。リーダーもメンバーもフルマラソンなんて走ったこともありません。半年以上前から取り組みは始まりました。リーダーとペアを組んで江東シーサイドマラソンのコースを走ったり、教室で前年のホノルルマラソンのビデオを見たり、講師の先生からマラソンについての講義をいただいたり、そしてハワイに乗り込みました。午前5時まだ暗い空に花火が上がり、スタート。そこからはリーダーと2人だけの世界です。42.195km リーダーも必死、メンバーも必死、逸太郎の初マラソンは4時間20分。ゴールした時はお互いにこれまで味わったことのない、言葉には尽くせないものがリーダーと彼らの中に生まれていました。

遡りますが、逸太郎9歳の時に長野で冬季五輪が開かれました。その頃、先生から紹介されたパラアスリートが長野パラアイススレッジに出場することになり、彼女を応援すべく及川先生率いる学生のパラ観戦旅行に参加しました。せっかく長野に行ったので志賀高原でのスキー競技も観戦しました。





しかし、観戦もそこそこに先生は五味姉弟にスキーをさせようとなり、現地に大会ボランティアとして常駐していた体育大学の学生さんに「この子を抱えて高速滑降して！」と依頼し、その後はタローを抱えるようにしてスピード、コース取りなどを体感させました。スキーの醍醐味を知ったタローはその日お昼ご飯の時間も惜しんで夕方リフトが止まるまでスキー三昧でありました。知らなかった世界へのめり込むようにタローはその後も暇さえあればスキーに取り組みました。冬のスキーキャンプはもちろん、一般の中高生合宿にも参加しました。そこには先生の密かな後押しがあったことを後になって知りました。中学生になってジャパンパラスキーの出場権を得、今では日本障害者スキー連盟の強化選手となり、世界大会には日本代表として参加する機会もいただいています。あの日長野のパラ会場での及川先生との体験はタローの琴線を揺さぶり、心のスイッチを押したのです。今の彼の全てはあの日が原点でした。

水泳は今も続けています。スキーでは今も強化選手です。選手としてトップを目指すことももちろん大事でありましょう。しかし、一方では、日々の練習の取り組みの中で「選手としてのマナー、ルール遵守、相手への配慮」そして「大人としての生活の軸を持つこと」等は子どもの時からフィットネスの活動を通してのご指導に培われたスタンスであろうと思っています。五味姉弟が18歳でYMCAを卒業した時、もうこれで水泳もスキーも終わりだと思っておりましたが、母の予想に反して彼らの生活は生き活きと広がっています。



Profile

五味 宣子 氏

知的障がいのある2人のお子さんが30年余にわたり東京YMCAのキャンプやフィットネスに参加。写真左から逸太郎さん、江里子さん、宣子さん